

# 仏教の教え〈<sup>おんぞう え く</sup>怨憎会苦〉と態度としての 臨床ソーシャルワーク —キリスト教の教えと対比して—

米村美奈\*

私たちは、生まれた時から多様な人間関係に組み込まれて生活を営んでいる。そこでは、関係する相手を自ら選べず、出会った人と学校生活、職場生活や近所付き合いをしなければ日常生活に支障をきたす。日常生活だけでなく、対人援助の専門職であるソーシャルワーカーも、たとえ好まない相手が相談に来て拒否することは倫理上、許されない。また、どんなに厳しく好まない環境が訪れても、そこで支援を展開することが求められる。

こうした避けて通れない状況を、仏教では広い意味で「<sup>おんぞう え く</sup>怨憎会苦」といい、対処の心得を伝えてきた。この仏教の教えは、気づかないうちに私たち日本人の精神構造に深く根づいている。一方、西洋発祥のソーシャルワークはキリスト教の教えを起源とし、基盤としている。それゆえに、キリスト教の教えそのままに、日本でソーシャルワークを展開するとき違和感を覚える。日本人の精神や生き方に溶け込んだ、その差異を考慮する必要がある。

本稿では、仏教の教えとキリスト教の教えの事例の一端を比較することで、日本でのソーシャルワークの基本的な態度に、仏教の教えが現れていることを明らかにする。

キーワード：臨床ソーシャルワーク 怨憎会苦 仏教 キリスト教

## 1. 研究目的

### (1) 多様な人間関係で生じる苦

私たちは、この世に誕生したときから、より正確に言えば出産・誕生に先立つ受胎のときから、そして母体内で胎児として<sup>はぐく</sup>育まれるときから、人とのかかわりのもとで生きている関係の存在である。しかも子は親を選べないことに象徴されるように、誕生後の家庭での子と親の関係や家庭環境に始まり、保育所での乳幼児と保育者、小・中学校での児童と担任教師、クラスでの同級生

---

\* 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

や部活動での部員との関係など、多種多様な関係性は自ら選んだものというよりも、周囲の状況によって成り立つ関係性が多いといえよう。

自我の目覚めと発達にともない、自発的な選択の可能性が拡大する年齢の高等教育以降にあっても、本人の希望どおりの生活環境が整い、勉学に励み学生生活を謳歌できるとは限らない。さらには職業選択をしたのちの就職先にあっても、上司や同僚や取引先の担当者など、多様な人間関係に組み込まれながら日常生活を営むことになる。そして、好むと好まざるとにかかわらず、こうした他の人との人間関係を通していろいろな喜びに出会い、心豊かな感興に癒される半面で、人間関係に基づく苦しみ、悩み、怒り、悲しみに出会わざるを得ない。

人間関係に起因する苦しみの一つが「嫌な人との出会い」「嫌な人と共に過ごす苦しみ」であり、そうした苦しみはさまざまな場で発生する。日常でいえば、学校内外でのいじめや、職場等での各種のハラスメントもある。たまたま乗り合わせたバスや電車の乗客の間でも、同じ趣味を通じて集まった気心を知ったグループの間でさえも起きる。愛し合って結ばれた結婚生活においても、子どもの流産や夭逝などの苦境に遭遇したり、思いがけぬきっかけから始まったDVに苦しむなど、実にさまざまな場面で「嫌な人との出会い」「嫌な人と共に過ごす苦しみ」は起き得る。仏教ではこれらの苦を「怨憎会苦（この世の中で恨み憎む者と出会い、共に暮らさなければならぬ苦しみ）」という。

本稿では、臨床ソーシャルワークを、ソーシャルワーカーとクライアント間の専門的な援助関係として取り上げる。この専門的援助関係は、援助者とクライアントとが対等な関係の上に信頼関係を築くことが基本で、そこから問題解決の支援が始まる。そして信頼関係を構築する際に、大きな影響を与えるのがクライアントに相対する援助者の態度、姿勢である。

しかし、実際には対人援助の専門家であっても、さまざまな「怨憎会苦」を乗り越えなければ信頼関係を築けないし、乗り越えることは容易ではない。「怨憎会苦」は日常的な人間関係でも頻発するが、援助場面でどのように対峙すべきなのかを課題として認識しながら本稿の考察を深めていきたい。

## (2) 非日常的な苦

苦しみには日常のものだけでなく非日常的なものがある。具体的には2011年（平成23）3月11日に発生した東日本大震災に代表される地震や津波などの災害もまた、人にとって苦しみそのものである。世界中に蔓延したコロナ禍もまた日常を非日常に変化させ、人びとの苦境を増幅させた。これらの災害や苦境などの「嫌な事との出会い」「思いもよらない嫌な事態」から派生する苦しみ、すなわち怨憎会苦は数えきれないほど多い。

そして究極の苦しみは国と国との戦争で発生する。戦争は国家や集団間の武力衝突や敵対行為で生じる極端な怨憎会苦で、平時では人を殺せば殺人罪であり、法律に基づき相応の処罰を受け

る。しかし非常時の戦争では勝つために敵兵を殺しても殺人罪とならない。戦争による苦しみは、敵味方双方の身体的な傷害、殺害だけでなく、戦闘員でない民間人の大量虐殺や拉致・拷問などに発展し、住宅環境や自然環境の破壊など、物心両面での精神的な苦痛は計り知れない。

戦争では非人道的な行為が行われ、想像を絶する苦しみ生まれるのが常である。1945年（昭和20）の第2次世界大戦の終結以来、約80年近くにわたって大規模な戦争は過去のものと考えられてきた。しかし、2022年（令和4）2月24日のロシアの侵略に端を発した「ウクライナ戦争」が現実のものとなった。この事実を無視することはできない。

そして非常時の象徴ともいえる東日本大震災やコロナ禍、ウクライナ戦争勃発のあと、精神科医・心理学者のヴィクトール・E・フランクル（Viktor E. Frankl, 1905～1997）の読者が急増し、フランクルの業績が再評価され、ナチスのホロコースト（大虐殺）から生還した直後に執筆した『夜と霧』などに記された、究極の苦しみに対する対応が注目を集めている。

### (3) ソーシャルワークの苦への対応

ソーシャルワーク（social work）は、個人や集団が抱えるいろいろな問題や困難、苦しみに対して支援や介入を行う専門技術である。

支援を展開するソーシャルワーカー自身が、「あるべき理想の姿と、どうしようもなく自分でコントロールできない一線を越えてしまうような現実に苦しむ」など、一般の人の想像をはるかに超えたさまざまな苦しみ現実のものとなっているのも、偽らざる実情である。

筆者は人間関係学を基礎に個人や社会の関係性に着目したソーシャルワークを「臨床ソーシャルワーク」と考える。そうした立場に立つとき、人間関係における「嫌な人との出会い」「嫌な人と共に過ごす」「嫌な人への支援を行う」などの苦しみや、「非常時での避けられない嫌な事との出会い」を越えることでしか展開できないソーシャルワーカーの業務は、いかにして成り立ち得るか考えていきたい。

私たち日本人の精神構造の根幹の一つをなしている仏教の基本的な教えや、そうした教えを体現した歴史上の仏教者の事例、さらに現代のソーシャルワークの現場での事例などを取り上げ、西洋の社会福祉（social work）の原点であるキリスト教の教えと対比し、その比較から考察したい。

### (4) 本稿の研究目的

本稿の研究目的は以下の2点である。

第1点は、論考のタイトルに示すように、最初に仏教の基本的な教え「八つの苦しみ（四苦八苦）」の一つである「怨憎会苦」を取り上げ、人間関係を中心に「この世の中では恨み憎む者とも会わなければならない苦しみ＝怨憎会苦がある」と説く仏教経典の典拠と教えの内容を確認する。さらにその怨憎会苦を解決する教えを説く仏教経典を示し、苦しみに直面しながらも怨憎会苦に

対応した法然（浄土宗の開祖,1133～1212）と、怨憎会苦の苦しみの解決法をさらりと洒脱しゃだつに説いた沢庵たくあん（江戸初期の禅僧,1573～1645）など、代表的な仏教者の教えを検討する。さらに、ソーシャルワークの現場での事例などを検討する。

第2点は、キリスト教の教えに基づく事例を検討する。そのうえで、臨床ソーシャルワークが課題とする「態度としての臨床」の援助関係において、仏教の教えの「怨憎会苦」に象徴される、「嫌な人との出会い」「嫌な人と共に過ごす」「嫌な事との出会い」「嫌な人への支援を行う」などの苦しみをどのように理解するのか、その概念整理を行い、臨床ソーシャルワークの理念との考察をする。

## 2. 仏教の教え〈怨憎会苦おんぞうえく〉

### (1) 仏教の教え「7つの布施」と臨床ソーシャルワーク

筆者はこれまで、仏教の基本的な教えを手がかりに、臨床ソーシャルワークとの比較検討を進めてきた。例えば、先の「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察―「無財の七施」を手掛かりに」の論考（米村2022A）では、仏教を貫く教えの一つである「無財の七施」を取り上げ、財産のない人でもできる7つの布施の第一「眼施」とソーシャルワーカーとを比較し、「自らが援助の道具であるソーシャルワーカー」と関連して、次のように考察した。

「布施」はいずれも自分の意志で、できることを行う寄付である。釈尊は、たとえ財力がなくても、人としての存在そのものに大きな意味があり、どのような境遇にあっても一人の人としてできる布施があることを教え、相談者が貧しさの悩みや自己否定から一步踏み出し、自らの可能性を發揮していこうとする姿勢が芽生えるように促したのである。

ソーシャルワーカーも、道具や手段を持たずに仕事をしている。強いて言えば自分自身そのものが重要な道具といえる。専門職であるソーシャルワーカーは、専門的な知識、技術を持たなければクライアントに対する責任が果たせない。自らの専門性を高めるには、自分自身を常に磨き、自己の特性を認識し、適切に自己を活用することが求められる。

「無財の七施」の眼施がんせ・和顔施わがんせ・心施しんせの教えは、相手に対して自分がどうあるべきかを説いている。例えば、眼施のように優しいまなざしを相手に向けることは、ソーシャルワークの基本的な姿勢としても重要である。クライアントを受容したところから援助が始まるわけであるが、相手に向けるまなざしが優しさに満ちあふれるとき、クライアントは重い口を開いたり、安心して感情を表したり、自分に自信を得たりして、ソーシャルワーカーとの関係が芽生える。（米村2022A：1-10）

続いて、「臨床ソーシャルワークの概念の再検討—仏教の「愛別離苦」を手がかりに—」では、原始仏教以来の教えである四苦八苦の一つ「愛別離苦」を取り上げて臨床ソーシャルワークの理念への理解を深め、合わせて「臨床ソーシャルワーク」の概念の変遷を考察し、その根底にキリスト教の教えがあることを論及した（米村2022B：23-40）。

本稿は、仏教の基本的な教えを手がかりに臨床ソーシャルワークの理念を再検討する、筆者の研究シリーズの続編に当たり、四苦八苦の一つ「怨憎会苦」を取り上げるものである。

## (2) 仏教の教え「四苦八苦」と怨憎会苦

仏教では、人がこの世で出会う苦しみ・苦境を①生苦、②老苦、③病苦、④死苦の四つの苦（「四苦」）と、⑤愛別離苦、⑥怨憎会苦、⑦求不得苦、⑧五陰盛苦に分類し、合わせて「四苦八苦」の教えとする。

仏教の「怨憎会苦」の教えをよりよく理解するために、先の論考（米村2022B：23-40）と重なる点があるが、改めて「四苦八苦」の教えを検討する。仏教学者中村元は大著『広説佛教語大辞典』で以下のように説明している。

- 1) 生苦…生まれることの苦しみ。輪廻転生し再び生まれる苦しみの意も含む。
- 2) 老苦…老いゆくことの苦しみ。
- 3) 病苦…病にかかる苦しみ。
- 4) 死苦…死ぬことの苦しみ。
- 5) 愛別離苦…愛する者と離れる苦しみ。
- 6) 怨憎会苦…この世の中では恨み憎む者とも会わなければならない苦しみ。
- 7) 求不得苦…欲して求めてもなかなか物事を得ることのできない苦しみ。
- 8) 五陰盛苦…五蘊盛苦・五取蘊苦ともいい、人間の身心を形成する5つの要素（五陰・五蘊、すなわち色・受・想・行・識から生ずる苦しみが盛んに起こることをいう。（中村2001；640）。

また、代表的な仏教辞典である宇井伯寿監修『仏教辞典』では「apriya-samprayoge-duḥkha 怨憎せる人と共に会合せざる可からざる苦。八苦の一」（宇井1969：111）とし、『岩波 仏教辞典』では四苦八苦の項目で、「苦しみを四つあるいは八つに分類したものの併称で、原始経典以来説かれる」と示したあとで、怨憎会苦を「憎い者と会う苦」と解説している（岩波1989：346）。

このように仏教で示す怨憎会苦は、長い輪廻転生のなかで、人と人の間には敵意や憎しみが存在し、対立する当事者間で引き起こす苦しみがあることを説く。上記の仏教辞典での語句説明では、人間関係に主眼を置いて限定的に説明しているが、仏教経典では人間関係の延長線上に幅広く怨憎会苦を捉え、集団間での戦いなどにも言及している。なぜなら紛争や戦争は、国家や集団

間の武力衝突や敵対行為によって生じる極端な形態の怨憎会苦で、戦争による敵味方の人々の苦しみは、身体的な傷害、殺害、大量虐殺や拉致・拷問などの精神的な苦痛、環境破壊など、さまざまな形で現れるからである。

仏教史でいうならば、釈迦もまた晩年にコーサラ国のヴィドゥーダバ王によって、釈迦族が滅亡させられるという惨劇に出会っている。古来、釈迦族滅亡の遠因は、当時インドをマガダ国と二分していた強国・コーサラ国のパセーナディ王が、釈迦族から妃を迎えようと求めたとき、コーサラ国の属国であった釈迦族はパセーナディ王の要求を拒絶できず、身分の低いカーストの女性を釈迦王族の娘と偽り、嫁がせたことに始まる。

パセーナディ王は釈迦族の美しい女性を気に入り第一王妃とし、ヴィドゥーダバ王子が誕生。王子は8歳のときに母の郷里・釈迦族の首都を訪問したが、釈迦族の子どもたちから母親の卑しい出自を知らされた上に屈辱的な扱いを受けた。王子は報復を心に誓い、王位につくと即座に釈迦族を攻めた。釈迦はヴィドゥーダバ王の進軍を3度中止させたが、4度目のときは暴挙を黙認せざるを得ず、ヴィドゥーダバ王は暴れ象を放って釈迦族を全滅させた。

森章司の論考「釈迦族滅亡年の推定」では、原始仏教経典や律、『大唐西域紀』などの記述を詳細に比較検討し、釈迦族滅亡は釈迦の入滅3年前、釈迦77歳のときであったと結論付けている(森2014:179)。これはヴィドゥーダバ王や釈迦族の人々の双方にとって、大きな「怨憎会苦」であったといえよう。

### (3) 『大般涅槃経』に説かれる「怨憎会苦」

『大般涅槃経』に説かれる「怨憎会苦」は、原始仏教から大乘仏教までを貫く基本の教えである。既述したように、仏教では人生で誰もが経験する苦しみを四苦八苦に分類し、誰もがそれぞれの人生で、嫌だなと思う人に出会い、各種のハラスメントを危惧しながらも嫌な人と共に仕事をし、集団で生活しなければならない苦しさを説く。さらに、人と人の縁は刻々に移り変わり、変化していく縁起の教えに照らせば、深く愛し合い結ばれた男女の仲でもいつかは心変わりして、「嫌な人」になる可能性もあるとしている。もちろん、前述のように怨憎会苦には人と人の人間関係だけでなく、集団や国家間に発生する「苦しみ」も含まれている。

四苦八苦を説く経典は、原始仏教の阿含経典や、大乘仏教経典の『法華経』譬喩品(『大正新脩大蔵経』第9巻13頁上)など数多くある。ここでは大乘仏教の経典である北涼天竺三蔵曇無讖訳『大般涅槃経』巻第12(聖行品)の漢訳原文と読み下し文を示す。

**原文**「復次善男子。八相名苦。所謂生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎会苦求不得苦五蘊盛苦」  
(『大正新脩大蔵経』第12巻435頁上)

**読み下し文**「また次に善男子。八相を苦と名づく。いわゆる、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦なり。」

それぞれの宗教には独自の教理や教条、戒律、儀軌などを記した聖典がある。たとえばキリスト教には『新約聖書』があり、イスラーム教には『クルアーン』がある。いずれも1冊に収められるほどの分量である。

これに対し、仏教にはさまざまな教えを説く膨大な経典が残されている。涅槃経は釈迦の入滅を主題とする経典群の総称で、原始仏教でも大乘仏教でも、数種の涅槃経典が説かれている。苦怨憎会の典拠として取り上げた『大般涅槃経』は「一切衆生悉有仏性」(すべての人々に成仏の可能性はある)という大乘仏教の究極の教えを説く経典として有名であり、中国・日本の仏教に多大な影響を与えた経典の一つである。

#### (4) 『法句経』に説かれる「怨憎会苦」の解決法

怨憎会苦、すなわち「憎い人と会わねばならない苦しみ」の解決法が、南方仏教伝来の最も古い経典の一つ、パーリ聖典の『Dhammapada (ダンマパダ)』に説かれている。同経典の中村元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』(岩波書店,1991年)の訳文と、漢訳の『法句経』を参考に平易に訳した友松圓諦の訳文・現代語訳を次に示す。

実はこの世においては、怨みに報いるに恨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。恨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。(中村1991:10)

まこと、怨みごころは  
 いかなるすべをもつとも  
 怨みを懐くその日まで  
 ひとの世にはやみがたし  
 うらみなさによりてのみ  
 うらみはついに消ゆるべし  
 こは易らざる真理なり (友松2020:14)

〈現代語訳〉

まことに、他人をうらむ心を以てしては、どうしても、そのうらみを解くことは出来ない。ただ、うらみなき心によってのみ、うらみを解くことが出来る。このことは永恒に易ることのない真理である。(友松2020:268)

中村訳と友松訳を参考にして、さらに平易に意識すれば、「わが身が受けた怨みに対し、恨みを抱いて報復したならば、いつまでたっても(報復を)繰り返し、解決しない。受けた怨みはそのままにして、相手への恨みを捨ててこそ、初めて解決する。これは永遠の真理である」となろう。

### (5) 父を殺した敵への恨みを捨て、出家した法然上人

受けた怨みをそのままにして腹の内に収め、報復せずに、相手への恨みを捨てるのは、言うは易しく、実行するのはなかなか難しいものである。美作国（現在の岡山県美作市など岡山県北部地域）の豪族・漆間時国（法然上人の父）は、敵の襲撃を受け絶命寸前の身でありながら、枕辺に9歳になる息子・勢至丸を呼び、この難しい解決法を実践するように厳しく命じた。

「わしはこの傷で死ぬであろう。だが、かたき討ちはやめよ。敵を恨んではならない。もしお前が父の仇を晴らせば、次はそなたが狙われる。怨みは恨みによって解決できないのだ。かたき討ちをやめよ……」

と命じた。武士の子として育った勢至丸にとって、親のかたき討ちは当然で、むしろ「立派にかたきを討て」というのが普通である。しかし、父・時国は最後の力を振り絞って、

「早く、世俗を捨て、わしの菩提を弔い、立派な坊さんになれ」

と、重ねて遺言し、絶命した。

信心深い時国なればこそ、怨みの連鎖を断ち切り、復讐し合う悲しみから勢至丸を救おうとしたのである。父の非業の最後を見届け、勢至丸はひたすら精進して15歳のときに天台宗の総本山比叡山延暦寺に登り、受戒し僧名の源空を名乗り、本格的な仏道修行に邁進した。

やがて、法然と名を改め、仏教諸宗の教学に通暁し「智慧第一の法然坊」と称された。伊藤唯真は法然の教えが人びとの苦しみや悩みを救う庶民仏教として開かれていく契機を、次のように記述している。

保元の乱がおきた年（1156）、法然は24歳であった。彼は山をおりて、三国伝来の生身の釈迦として朝野貴賤の崇信を集めていた嵯峨の釈迦堂に参詣した。求道の成就を祈願するためである。ここで法然は、自分と同じように参籠し、本尊に救いを祈念している民衆の姿にふれ、自分ひとりが救われるだけでなく、このように苦しみ悩むものすべてが救済される道を見出してこそ、本当の宗教者である、と気づいた。はじめは自分ひとりだけの参籠であったが、庶民の姿が視野に入ってから、いまは大衆が救われる仏教がもためられているのだと、法然は痛感するのであった。（伊藤1989：20～21）

父・時国の「怨みは恨みによって解決できない。怨みの連鎖を断て」との遺言を固く守り、自分自身の仏道の成就に専心していた法然が、苦しみ悩み必死に祈願する人びとの姿を見て、目を開かされたのである。

法然が活躍したのは平安後期から鎌倉初期であり、末法の世を象徴するかのようには、法然53歳の1185年（文治元）に、栄華を極めた平家一門が壇ノ浦で滅亡する。壇ノ浦の戦いで源氏の武将・熊谷直実は、弱冠17歳の平敦盛と一騎討ちをして首を斬ろうと甲を上げて顔を見ると、わが



子と同じ年頃の若者であった。直実は涙ながらに敦盛の首を切る。人殺しは地獄必定とされた時代である。合戦終結後、直実は法然と面談し、敦盛の菩提を弔い、怨みの連鎖を断ち、出家する決意を述べ救いを求める。法然は「罪の軽重を問わず、ただ、ひたすらに念仏を申せば往生するなり、別の方法はない」と諭した。直実は法然の弟子となり法力房蓮生と称し、源平合戦で亡くなった人々の菩提を弔い、念仏に励んだ。

ここに示した法然とその弟子熊谷直実の逸話は、「怨みの連鎖」を断ち切った姿である。このような事例から仏教の「怨憎会苦」のあり方を学ぶことができる。

## (6) 軽妙な沢庵和尚の教え

戦国末期から江戸時代初期に活躍した沢庵和尚(1573~1645)は、相手の力量に合わせて身近な譬を用いて分かりやすく軽妙に語る座談の名手で、臨濟宗の京都の名跡・大徳寺153世に就任しながら、理不尽な幕府の沙汰(「紫衣事件」)に激怒し3日にして退くなど硬骨の行動で知られた高僧である。

徳川家康によって天下統一が行われ、合戦のない平和な時代が訪れた江戸時代初期に、家康・秀忠・家光という三代の徳川将軍に宗教ブレーンの一人として仕え活躍した。また、幕府の剣術指南役・柳生但馬守宗矩の禅の師匠であり、宗矩とともに合戦で人を切る「殺人刀」の剣術を、人を活かす「活人剣」の剣道に指南したことで名高い。

折りにふれて話した珠玉の小話を集めた話の宝箱の一つに『結繩集』がある。そのなかで、思い通りにならない人生の悩みや、避けがたい怨憎会苦の相談を受けたとき、含蓄に富んだ和歌を詠んでいる。牛込覚心編著『沢庵和尚 心にしみる88話』(国書刊行会,2005年)では次のように紹介し、沢庵和尚の真意を解説している。

たらちねに、よばれて仮の客に来て、こころのこさず、かえる古里。(『結繩集』)

〈現代語訳〉父母に呼ばれて、この世に仮の客としてきたが、(寿命が尽きたので)心残さず、古里のあの世に帰ります。

この世の「仮の客」とは、なかなかの名文句です。

——われわれは、この世に客に来たと思えば、苦勞もなくなる。心にかなう食事に出会えば、良いご馳走と思ひ、心にかなわぬ不満な食卓も、お客なんだと考えれば、食べられるだけでも幸せと、感謝の気持ちで食べられる。

——お客であれば、夏の暑さにもこらえ、冬の寒さも我慢しなければならない。孫や子どもや兄弟も、この世の相客と思えば仲良く暮らして、あとに心残りを作らず、この世からさよならするのがよいと思うよ、ほんと。(牛込2005:212~213)

人はこの世で生きていく限り、いやでもさまざまな怨憎会苦の苦しみを味わねばならない。それは避けがたいものである。小細工を弄<sup>ろう</sup>して安易に解決できるものでもない。いやな相手の心情を変えさせることは難しく、まずは自分の心持<sup>こころもち</sup>を変え、この世に仮の客として来たのだと思えば、たいがいの不満や怨憎会苦も受け止められるよ、という沢庵和尚の慈愛にあふれた論<sup>ろん</sup>の和歌である。

この沢庵和尚が相談相手に寄り添いながら示す仏教的教えの根底には、1) まず、現実を直視せよ。2) 誰にでも嫌な人は必ずいる。嫌な人と共に暮らさねばならない場合も多い。3) この世は理不尽に満ち、思いがけない病気にかかることもある。4) 地震などの天変地異に遭遇することもある。5) 何事も、自分の思い通りにならないものだ。6) 思い切って、ありのままの自分を出して、開きなおれ。7) 開き直れば、一瞬にして人の心は前向きになれる。8) 正直に自分のありのままの姿を示せば、仲間やまわりの人が助けてくれる。9) 仏教の縁起の教えに従えば、自分の気持ちも、嫌な相手の心も、時間とともに変化していくものだ。10) それゆえに、何かのきっかけで、思いがけず仲直りできるかも知れない、という縁起の理法に基づく確固<sup>あん</sup>たる安心<sup>あんじん</sup>の境地<sup>うかが</sup>が窺えよう。

沢庵和尚の教えを総括すると、「怨憎会苦」といえども、「あるがままに対処すること」に尽きるといえよう。

### (7) やって見た方がいいのは「一人での夜勤の仕事だな」

次に紹介するのは、現代における事例で、淑徳大学の卒業生へのインタビューである。

2015年(平成27)9月2日、淑徳大学の福祉を学ぶ4人の学生に筆者が付き添い、卒業生の佐藤修峰さん(第13期生)をある企画で取材した折の光景である。主体的に学生がインタビューし、福祉の現場の実状に話題がおよび、学生の一人が、「佐藤さんにとって、福祉職で一番大切だと思うのは何ですか?」と質問した。佐藤さんはしばらく考え、「気概、気概が一番大事だと思うな。やり抜く気概ね」と答えた。そして福祉の現場に立つ覚悟を学生たちに語りかけた。

特に、介護の仕事とか、福祉の現場の仕事で、やって見た方がいいのは夜勤の仕事と訪問介護。特に夜勤はね、その人のキャパシティが見えるし、人間性も見える。つまり、皆と楽しく和気あいあいと仕事しているときには、気持ちに余裕があるけれども、一人で夜勤をやって、10人とか20人の利用者を担当するとなったときに、徘徊<sup>はいかい</sup>する人、暴れる人、漏便<sup>ろうべん</sup>してオムツや、うんこでいたずらする人もいて、それを片づけなきゃならない。対応能力を超えて困惑するわけだな。

困惑に耐えきれなくなったら、利用者を叩いたり、ドライバーで炙<sup>あぶ</sup>ったり、ナースコールを無視したり、報道で見たことのあるようないじめをする人もいる。自分は絶対そんなことしないと、誰もが思ってるんだけど、一人になったときに人間力が問われるんだな。

そこはやはり、利用者に対する愛情とか、福祉の仕事に対する誇りとかを、きちんと持っていないと、多くの職員とわいわい楽しくやっているときの自分が本当の自分だと思っていると、そうじゃない自分がいるからね。

福祉では専門性を高めることが大事。スキルを上げることも大切。だからしっかり学ばなければ。けれど、本当は、もっと根元の次元で試されているということ。福祉の仕事が好きでも、能力的にはできるはずでも、挫折する人も多いんだよ。そこを乗り越えられないとね。

乗り越えるとき力になるのは、さっきも言ったけど、人に対する愛情、福祉の仕事への信念、誇りだと思うよ。それは、大学時代に遊んでいたオレが言うのもなんだけど、「共生」という、淑徳の建学の精神を<sup>しんす</sup>心<sup>こころ</sup>に据えた気概だよ。(米村2021：224～226)

佐藤さんの軽妙な中にも真剣な語りかけは、今に続く福祉現場での姿であり、援助者が置かれている状況である。そこには、大学での理論だけではとらえきれない「福祉現場の怨憎会苦」が、佐藤さんの体験に凝縮されて示されている。まさに、現場に起こる「怨憎会苦」を援助者自身がどのように理解し、自己コントロールしていくのが援助関係の中で問われているのである。

#### (8) 非常時(災害時)におけるソーシャルワークの機能と役割

佐藤修峰さんに対する学生の取材は、24校の福祉系大学が加盟する「福祉系大学経営者協議会」監修の『災害ソーシャルワークの可能性—学生と教師が被災地でみつけたソーシャルの魅力』のプロジェクトの一環であった。筆者はこのとき、「災害時におけるソーシャルワークの機能と役割—災害ソーシャルワークから専門性を問う—」と題する考察を同書に執筆し、「災害時における『生きる意味』へのソーシャルワーク支援」を次のように記した。

被災者は、数多くの喪失を一度に体験しています。家族を失い、住居をはじめとする財産を失い、仕事を失い、故郷である住み慣れた地域を失っています。この喪失体験から体調不良を引き起こし、生きる希望と生きる意味を失った人々が存在しています。そこでソーシャルワークは、生活再建のための物質・経済的支援を提供するにとどまるのではなく、「人間としての存在」を支える支援を行っています。(略) こうした「人間としての存在」を支える支援が被災者の生活の土台を支え、喪失体験から生き続ける可能性を見出すことになるのです。(米村2017：91)

筆者はこの考察を締めくくる「おわりに」で、被災地のソーシャルワーカーが語ったことばが強く記憶に残っている。

未曾有の災害により、多くのものを失っています。言葉として表しきれない喪失感があります。東日本大震災後、3月11日になると毎年、被災地の報道が一段と増します。復興の様子や明るい話題も多くありますが、胸に刺さるような映像やインタビュー、取材記事も続きます。失ったものの大きさを改めて痛感します。こうしたなかで、ある被災地のソーシャルワーカーが、「災害時のソーシャルワークは、日常（平常時）のソーシャルワークの延長線上にある」と語ったことが印象的です。（米村2017：99）

筆者は、人間関係を中心とする平常時の「怨憎会苦」も、非常時の「怨憎会苦」も、各人にとって変わらない苦しみであるように、対応する立場のソーシャルワークの援助活動も、日常（平常時）の延長線上にあることを再確認した。

さらに被災地で「怨憎会苦」を考える時には、他者を支援するソーシャルワーカー自身や家族も被災している状況で、他者を支援しなければならない実態を見て、そうした時にソーシャルワーカーが他者にどう関わられるのかが問われている重要性を痛感した。

一方で、ソーシャルワーカーは人類史上に残るような未曾有の災害だけでなく、日常的な業務における「怨憎会苦」への対応が、常に求められている。例えば、病院で重度の障がいをもって生まれた子どもを出産した母親が「障がいのある子どもを育てる意味がない。」と言って、必要な治療を拒否し養育を放棄する発言をソーシャルワーカーにした事例がある。

人権の尊重を最も大事な理念と教育され、業務に携わるソーシャルワーカーにとって、母親の気持ちを素直に理解し、前向きに支援する気持ちがわからないのは当然であろう。それどころか、発言を身勝手と感じ、顔も見たくないという気持ちがわくこともある。いくら障がい児を生んだ母親特有の気持ちを理解しなければならないと頭でわかっている、強く「育てる気持ちがない」と言い放つ母親の態度を、共感的に受け止められないソーシャルワーカーの心境も否定できない。

実際は、このようにクライアントの言動を素直に受け止め切らない事例は、枚挙にいとまがない。しかし、専門的援助関係の構築に必要なのは、先に述べた対等を基礎とした信頼関係である。相手を受け入れられないところに、真の対等な信頼関係は生まれにくい。

理想と厳しい現実のはざま、専門的援助関係の構築を目指す援助者にとって、先の沢庵和尚の仏教に基づく教えは、重要な対応方法となり、援助の指針にもなり得るだろう。

### 3. キリスト教の教え〈あらゆる人のなかに神がいる〉

#### (1) 和魂洋才とキリスト教

次にキリスト教における事例を検討する。筆者は先の論考「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察 (2)―『臨床Clinical』の概念化を手がかりに一」のなかで、著者の専

門研究分野である「臨床」「社会」「福祉」などの学術専門用語が明治以降の翻訳語であり、それ以前の日本になかった概念で、その根底にキリスト教の教えがあることを詳述した（米村2023：23-40）。特に佐藤優解説の新書版『新約聖書Ⅰ』を取り上げ、明治の文明開化の風潮のもとに掲げられた「和魂洋才」による影響の大きさを検討した。本稿の怨憎会苦を考察するうえで重要な視点であるので、その一部を掲載する。

近代は、欧米が主導して展開された。近代化の過程で日本人は「和魂洋才」をスローガンに掲げた。しかし、「洋才」すなわち欧米の学術や技術の背景には、それを支える「洋魂」がある。「和魂洋才」には、木に竹を接ぐような無理がある。その無理がどこにあるかを知るために、「洋魂」を形成した重要な要因であるキリスト教について知ることが有益と考える。（佐藤2011：10）

筆者は佐藤優の鋭い指摘に強く同感するものである。そこで仏教の「怨憎会苦」に相当するような、キリスト教の教えを検討する。

## (2) あらゆる人のなかに神がいる

作家の曾野綾子はカトリックの学校で育ち、1979年（昭和54）にローマ法王庁からヴァチカン有功十字勲章を受章し、自らキリスト教の信仰を持ち続けていることを表明している。そこで、曾野綾子著『老いの才覚』から、キリスト教の教えと実践の姿を考察する。まず、自らのキリスト教的立脚点を「性悪説に立てば、人と付き合っても感動するばかり」と題して、以下のように述べている。

現実の暮らしの中では、私は明らかに性悪説で自分を律してきました。

カトリックの学校で育ったので、すべてにおいて、いい人などいないことを比較的若い時からわかるようになりました。キリスト教は性悪説ですから、人間はそのままにしておけば、人間の尊厳を失うほどに墮落することも簡単である。しかし信仰によって、あるいはその人に内蔵されている徳性によって、人間を超えた偉大な存在にもなれる、ということをきっちり教えられました。（曾野2011：51）

配偶者や嫁に対する不満など、「怨憎会苦」ともいえる事例について、「受けるより与えるほうが幸いである」という聖書の言葉を引きながら、次のように持論を展開する。

受けるより与えるほうが幸いである、と聖書に書かれています。これは信仰の問題ではな

く、心理学的実感として正しいでしょう。

ただ受けているだけの人は、もっと多く、もっといいものをもらいたいと際限がなくて、配偶者が「してくれない」、嫁が「してくれない」と不満が募る。しかし、与える側に立つと、ほんの少しのものでも些細なことでも楽しくなるし、相手が喜んでくれれば、さらに満たされる。与えるほうが、ずっと満足感があるわけです。

大人になれば、与える側にまわらなければいけません。子供の時は、おっぱいをもらって、抱っこしてもらって、おむつを替えてもらって、ランドセルを買ってもらって、学校へ行かせてもらって、と全部してもらう。(略)人間は受けもし、与えもしますが、年齢を重ねるにつれて与えることが増えて、壮年になると、ほとんど与える立場になります。そしてやがて、年寄りになってまた受けることが多くなっていく。その時に、人によって受け方の技術に差が出てきます。

ただ黙って受けるだけなら、子供と同じです。もし、「ほんとうにありがとう」と感謝して受けたら、与える側はたぶんうれしい。(略)与える側でいけば、死ぬまで壮年だと思えます。おむつをあてた寝たきり老人になっても、介護してくれる人に「ありがとう」と言えたら、喜びを与えられる。そして、最終的に与えることができる最も美しいものは「死に様」だと私は思っています。(曾野2011: 70~72)

性悪説で自分を律してきたという曾野は、困った人を助けるキリスト教の基本の教えを以下のように述べる。

神は天国にいたりとか、私たちのそばにいたりとか、いろいろ言われますが、聖書には「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイによる福音書25章40節)と書かれています。つまり、神は今、あなたが相対している人の中にいる、と言うのです。

それを知った時、私は困惑しました。なぜなら、人に意地悪すると、神にも意地悪をしたことになる。喧嘩をすると、私は神にも喧嘩を売っていることになるからです。

私が、大久保清という連続殺人犯の事件をモデルにした新聞小説『天上の青』を書いたのは、「あらゆるひとのなかに神がいる」という証明を試みようとしたのです。そしたら、今でも忘れられませんが、一人の老人から手紙が来ました。小説家ともあろうものが、このような不道徳な筋を書くのはけしからん、と。

でも、相対している人の中に神がいる、という思想があるからこそ、シスターたちは、相手が嘘つきであろうと狡かろうと、困っている人は皆助けるのです。(曾野2011: 161)

さらに、嫌いな姑しゅうとめがいたら、嫌いな嫁がいたら、そのままでもいい、しかし理性の愛を意志の力で行いなさい、「理性の愛」だけがほんとうの愛だと聖書が言っています、と綴っている。

聖書の愛には、親子の情愛、性的な関心、友愛、それから「敵を愛しなさい」（ルカによる福音書6章27～36節）という時の苦痛に満ちた「アガペー」という本物の愛があります。これは、嫌いな人に対してでも、努力して、心から愛しているのと同じような行動をとる「理性の愛」のことです。

アガペーのいちばん悲痛な形が赤十字で、傷ついた敵を撃ち殺さないで救う。敵はやはり憎いし、殺したいですよ。でも、そこを思い留まる。そういう理性の愛だけが、ほんとうの愛だと聖書は言います。

わかりやすく言えば、嫌いな姑さんがいたら、無理に好きになることはない。嫌いなままでいいけれど、自分の母親ならどうするだろうかと思うことを意志の力でやりなさい。嫌いな嫁がいたら、嫌いなままでよしい、しかし自分の娘に対してするのと同じことをやりなさい、ということです。（曾野2011：162）

曾野の述べるキリスト教の核心は、「あらゆるひとのなかに神がいる」、すなわち、人は創造主である神の子であるということになる。この点が仏教の教えと大きく異なるところである。仏教では諸仏の教えを説くが、諸仏はキリスト教の神のごとき創造主ではない。

### (3) 天国の特別な子ども

本稿のテーマである「怨憎会苦」に関するものとして、懐妊・出産という人生の大きな出来事と、神の子という言葉が連動するとき、思い浮かぶのはアメリカの牧師夫人エドナ・マシミラ（Edna Massimilla）がダウン症のわが子への思いをこめた詩「天国の特別な子ども（Heaven's Very Special Child）」である。

医学の進歩により、ダウン症の原因が染色体異常であることが判明してから、胎児の染色体異常を調べる出産前検査が話題を呼び、懐妊を喜ぶ親たちにとって、大きな試練が明らかになってきた。最近の新聞でも大きく報じられた。2021年（令和3）に静岡県の女性（37）が6回目の人工授精で妊娠し、医師の勧めで胎児の染色体異常を調べる母体血清マーカー検査を受け、結果は陽性。さらに染色体異常の結果を確定させる羊水検査ようすいにはわずかに流産の可能性があるので、夫（36）と話し、「流産の可能性があるならやめよう。どんな子でも受け入れて育てる」と決めた。生まれた子はダウン症であった。出産して半年後、元気に育つ子どもを見て、母親は心の底から「産んで良かった」と思えるようになった、という。（「朝日新聞」2023.5.10）

話を「天国の特別な子ども」に戻し同詩を抜粋すると、「天においてになる神様に向かって 天

使たちは言いました。／この子は特別の赤ちゃんで たくさんの愛情が必要でしょう。／この子の成長は とてもゆっくりに見えるかもしれません。／もしかして 一人前になれないかもしれません。どうぞ神様 この子のためにすばらしい両親をさがしてあげてください。／神様のために特別な任務をひきうけてくれるような両親を」と綴られている。

この詩は、アメリカのダウン症児を持つ両親たちの手記を集めた本の最後のページに載っていたもので、原作者不明のまま1970年代に大江祐子によって翻訳され、「こやぎ会（公益財団法人日本ダウン症協会の前身）」発行のパンフレット『この子とともに強く明るく』に掲載され反響を呼んだ。何名か原作者の名前が挙がったが、九州の久山療育園で詩を読み感動した鈴木伸の調査で、原作者エドナ・マシミラが判明した。彼女は鈴木への手紙で、「43歳で天に召された娘ルーシーがダウン症で生まれたおかげで、自分には、特別な助けを必要とする子どもたちのための詩を書く能力が与えられたと思う」と述べたという。（「京都ダウン症児を育てる親の会（トライアングル）会報（2004年4月号）」）

エドナ・マシミラの「天国の特別な子ども」は、創造主である神と、被創造主である「神の子＝人間」との関係を示した、まぎれもなく、キリスト教の教えに基づくものである。

#### (4)『夜と霧』新版にこめたフランクルの思い

ヴィクトール・E・フランクル（1905～1997）の『夜と霧』は、周知のように1945年（昭和20）4月にナチスの強制収容所から解放された直後、9日間で口述筆記し、翌1946年（昭和21）に出版された。ドイツ語のタイトルは『一心理学者の強制収容所体験』である。

世界中で翻訳され、ウイーンのヴィクトール・フランクル研究所によると、2012年現在、フランクルの著書はベトナム語版（2011年）やルーマニア語版（2012年）まで、40の言語で出版され、代表作の『一心理学者の強制収容所体験』は世界で1000万部以上発行されているという（河原2012：31）。1956年（昭和31）発行の日本語版（霜山徳爾訳『夜と霧』みすず書房）は、1955年（昭和30）発行のアルゼンチン（スペイン語版）に次ぐ、世界で2番目の発行であったという（河原2012：31）。

シベリア抑留から帰国した詩人石原吉郎は『夜と霧』を読み、「フランクル自身が被害者意識からはっきり切れていて、告発を断念することによって強制収容体験の悲惨さを明晰に語りえているということであります」と述べていることを河原理子は紹介している（河原2012：52）。この告発を断念する態度に、極限の苦しみに対応したフランクルの姿が象徴的に示されているといえよう。

『夜と霧』の原著は、70代になっていたフランクル自身によって1977年（昭和52）に改定新版が発行され、旧版にないエピソードが書き加えられた。本稿ではそのなかの挿入された一例を取り上げる。



解放後、ユダヤ人被収容者たちはこの親衛隊員（筆者注：収容所所長）をアメリカ軍からかばい、その指揮官に、この男の髪の毛一本たりともふれないという条件のもとでしか引き渡さない、と申し入れたのだ。アメリカ軍指揮官は公式に宣誓し、ユダヤ人被収容者は元収容所長を引き渡した。指揮官はこの親衛隊員をあらためて収容所長に任命し、親衛隊員はわたしたちの食糧を調達し、近在の村の人びとから衣類を集めてくれた。（池田2002：143）

新版『夜と霧』の訳者池田香代子は「訳者あとがき」で、旧版と新版との重要な相違を指摘し、上記の新たに加えられた親衛隊員（収容所長）の逸話について、『夜と霧』の作者は、立場を異にする他者同士が許し合い、尊厳を認めあうことの重要性を訴えるために、この挿話を新たに挿入し、憎悪や復讐に走らず、他者を公正にもてなした『ユダヤ人被収容者たち』を登場させたかったのだ、と私は見る。（池田2002：168）と指摘している。筆者もこの見解に同感である。

フランクは敬虔なユダヤ教徒である。石原が指摘する「告発を断念する」態度や、「立場を異にする他者同士が許し合い、尊厳を認めあうことの重要性を訴え、憎悪や復讐に走らず、他者を公正にもてなす挿話を加筆した姿勢に、フランクの「生きる意味」の真髓が窺える。

#### 4. 考察

本稿では、人間関係学を基礎に個人や社会の関係性に着目したソーシャルワークを「臨床ソーシャルワーク」と考える立場に立ち、ソーシャルワークを展開するソーシャルワーカー自身がさまざまな現場で、「援助者としてあるべき理想の姿と、自己コントロールできないような過酷な現実」に苦しむ姿を取り上げてきた。

ソーシャルワークの実践では、人間関係上に現れる「嫌だと感じる人への支援」などの苦しみに始まり、自然災害、戦争など非常時での自己コントロールを越えなければ支援できない苦しみもある。それは、単なる一時の我慢や自分を押し殺しての展開では限界が生じ、専門的援助関係の構築はできない。

ソーシャルワーカーが援助実践の場で「怨憎会苦」を乗り越えるあり方を、日本人の精神構造の根幹をなしている仏教の教えと、西欧由来のソーシャルワーカーの基盤にあるキリスト教の教えとを、比較し検討してきた。

仏教は、「この世は思い通りにならないもの」と受け止め、あるがままに受け入れる態度や姿勢を強調するのに対し、絶対的な創造主を基本とするキリスト教では性悪説に立ち、人間はそのままにしておけば、人間の尊厳を失うほどに墮落するが、あらゆる人のなかに神がいると思うから、相手が嘘つきであろうと狡かろうと、困っている人は皆助ける、と説く。

また、仏教で「恨みは恨みを捨ててこそ、解決する」と説くのに対し、キリスト教と同じ一神

教・ユダヤ教を信奉するフランクがナチスの強制収容所の所長の対応を取り上げ、立場を異にする他者同士が許し合い、尊厳を認めあうことの重要性と、憎悪や復讐に走らずに他者を公正にもてなす姿を示しているのは、軌を一にするものである。

ここで押さえておかなければならないのは、日本に導入され、教育・実践されてきたソーシャルワークは、キリスト教を基盤とする西洋生まれのソーシャルワークであるが、日本でソーシャルワークを展開する際の人間関係は、日本人のもつ素朴な仏教の教えを一切排除しては実施できない点である。

端的に言えば、日本のソーシャルワーク理論は、西洋流のソーシャルワーク理論が主流であり、それを実践する日本の援助現場での実践的態度や姿勢は、仏教の教えが土台になっていると考えられるのである。ここに理論と実践上の乖離<sup>かいり</sup>が生じても不思議はなく、筆者が、長くソーシャル活動に携わりながら抱き続けた「違和感」の根源があると推察している。この論点は筆者の更なる研究課題である。

## 文献

- 伊藤唯真 1989「法然の肖像—その生涯と思想」(『法然と浄土信仰』読売新聞社)
- 宇井伯寿監修 1969『仏教辞典』大東出版社
- 牛込覚心編 2005『沢庵和尚 心にしみる88話』国書刊行会
- 河原理子 2012『フランク『夜と霧』への旅』平凡社
- 佐藤 優 2011「新約聖書Ⅰ」文春新書, 文藝春秋
- 曾野綾子 2011『老いの才覚』ベスト新書, KKベストセラーズ
- 友松圓諦 2020『法句経』講談社学術文庫, 講談社
- 中村元, 他 1993『岩波 仏教辞典』岩波書店
- 中村 元 1991『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫, 岩波書店
- 中村 元 2001『広説佛教語大辞典』東京書籍株式会社
- 森 章司 2014「釈迦族滅亡年の推定」(『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇No.19. 釈尊研究会編『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【19】個別研究編Ⅳ』), 中央学術研究所
- Viktor E. Frankl 1977, Kösei -Verlag, München “EIN PSYCHOLOGE ERLEBT DAS KONZENTRATIONSLAGER” (池田香代子訳 2022年『夜と霧』みすず書房)
- 米村美奈 2017「災害時にけるソーシャルワークの機能と役割」(福祉系大学経営者協議会監修『災害ソーシャルワークの可能性—学生と教師が被災地でみつけてソーシャルワークの魅力—』), 中央法規出版
- 米村美奈 2021『淑徳人の証言2—学祖・長谷川良信に続くもの—』淑徳大学長谷川仏教文化研究所
- 米村美奈 2022A「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察—「無財の七施」を手掛かりに—」(『2021年度総合福祉研究』第26号), 淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究室

米村美奈 2022B 「臨床ソーシャルワークの概念の再検討—仏教の「<sup>あいべつりく</sup>愛別離苦」を手がかりに—」  
（『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第29号），淑徳大学大学院総合福祉研究科

米村美奈 2023 「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察（2）—『臨床  
Clinical』の概念化を手がかりに—」（『2022年度総合社会福祉研究』第27号），淑徳大学社会福  
祉研究所総合福祉研究室

## Duḥkha which is taught in Buddhist as the association with the unbeloved, and the attitudes in Clinical Social Works: Comparing with Christianity Teaching.

Mina YONEMURA

From the moment we are born, we find ourselves immersed in the diverse human relationships that shape our lives. We cannot choose whom we interact with in these relationships. However, if we were to avoid engaging with the they those we meet at school, at work, or in our neighborhoods, our daily lives would be disrupted. Social workers, who are professionals in providing interpersonal assistance, are ethically bound to help anyone who seeks their advice, even if they do not like that particular person. This is applicable to comes to them for advice, as well as in their daily lives as well. They must be capable of offering support, no matter how harsh and unfavorable the circumstances may be. In a broader sense, Buddhism refers to these inevitable situations as “On Zou E Ku,” which can be translated as “the pain of having to meet those whom we hate and resent.” It provides teachings on dealing with such encounters. Unconsciously, this Buddhist teaching has become deeply engrained in the mental structures of Japanese people. Social work, on the other hand, originated in Western culture and is rooted in Christian teachings. Therefore, I feel a sense of incongruity when trying to apply Christian teachings directly to the field of social work in Japan.

I believe we need to acknowledge the differences that have been integrated into the Japanese psyche and way of life.

By comparing specific examples of Buddhist and Christian teachings, this paper aims to demonstrate how Buddhist teachings are reflected in the basic attitudes of social work in Japan.

Keywords: clinical social work, On Zou E Ku -Association with the unbeloved is duḥkha, Buddhist, Christianity